日本教育新聞
創刊 1946(昭和21)年5月1日
発行所
日本教育新聞社
〒105-8436
東京都港区虎ノ門1-2-8
電話03(5510)7777(大代表)
郵便振替 00150-8-196500
©日本教育新聞社 2015
ご購読申し込み ☎03(5510)7828 Eメール kodoku@kyoiku-press.co.jp
ホームページ http://www.kyoiku-press.co.jp

フリースクール開設4年

元校長、不登校の子どもと向き合う

発達障害や家庭環境などを背景に学校を休みがちになった子どもたちの育ちを手助けしようと、小学校の校長が定年退職とともに、勤務していた学校のそばに「ボランティアスクール」を横浜市内に設立して4年。通ってきた子どもたちは学校に通い始めたり、自分のペースで学習を続けたりするようになった。教員時代に築いた人脈を生かし学校、地域社会と連携し、生きづらさを抱えた子どもたちを支えている。

横浜市

9年間にわたって横浜市立さつきが丘小学校で校長を務めた渡辺正彦さん。当時、校長室にはよく児童が集まってきた。教室にはどこかなじめず校長室の方が心地よい。そんな児童と向き合ってきた。

退職後には、学校になじめない子どもを徹底して手助けしたいと児童の保護者や同じ地域で暮らす住民たちに相談したところ、造園業を営む住民が土地と事務所を貸してくれた。「横浜みどりの学校ひまわり」と名付けて活動を始めた。

2月下旬の水曜日に訪ねてみると、午前11時を過ぎたころから小・中学生と活動や学習に付き添うボランティアが集まってきた。在籍校では授業真っただ中の時間帯だ。ある子は事務所を改装した部屋の中で机に向かい、算数を学ぶ。定年までは報道関係の仕事をしていたという男性が教師役を務めていた。

外では飼育しているニワトリを抱き抱えたり、ニワトリが産んだ卵を拾い上げたりする子どもたちがいた。鉄棒で逆上がりの練習をする子もいる。飼い主がいないネコにやった餌がなくなっていることに気付き、子どもの顔からは笑みがこぼれる。これが日常の光景だという。

週4回の開設。月に千～3千円ずつ集め、借地料や光熱費、動物の餌代などに充てる。ほぼ毎日、活動する渡辺さんをはじめ、協力してくれるボランティアに給料は出ない。

小学校2年生から中学校3年生まで40人ほどが登録。そのうち活動日には数人がやってくる。対人関係づくりが苦手な子の中には、渡辺さんがつくったボランティアスクールでも休みがちになってしまうことがある。登録しても通ってくるとは限らない。

学校でできぬ活動を試みる

渡辺さんは退職後、学校では難しい活動を試みた。コンピュータゲームやパチンコなどだ。1人でも楽しめるコンピュータゲームだが、通ってくる子どもたちにはできるだけ2人以上で遊ぶよう求め、制限時間を設け、守るよう指導した。順番待ちの経験も大事にした。社会生活を送る上での常識が身に付くよう心を配った。

パチンコは教員時代の教え子がその業界で働いていることから導入に至った。自分の手で玉を弾きチューリップを開かせる昔ながらのパチンコ。発達障害があり、何をやっても集中力が途切れがちになってしまう男児を夢中にさせた。

子どもにパチンコ。ふさわしくないかもしれない。だが、渡辺さんは時に支援してくれる人から叱られながら学校ではできそうにないさまざまなことを試してきた。

通ってくる子どもたちの8割くらいに発達障害の特性が感じられると渡辺さんは見る。しばしば子ども同士の関係が険悪になる。

危ないと思えば割って入るが子ども同士で解決できそうだと思えば、子どもたちが新たな力を獲得していく過程をそっと見守る。学校に勤務していたころは、したくてもなかなかかなわなかった子どもとの関わり方だ。

元校長だから、通ってくる子どもたちの在籍校との関わりが密接かといえば、そうとも限らない。元同僚や親しい校長がいる学校とは、互いに子どもの個別情報を伝え合うが、なじみの薄い学校に籍を置く子どもがやってくることになると、渡辺さんから積極的にそのことを学校側に伝えようとはしない。

保護者が望まないこともあるし、自分の教員時代の経験から、事情の分からない学校に接触することにためらいを感じるからでもある。

不登校の子どもが在籍校とは違う教育機関に通うとなると、学校側は「別の学校を選んだのか」と不快感を持つかもしれない。そうした事態は避けたいという。

児童委員らの研修会で講師

文科省は今年から、渡辺さんが設立したボランティアスクールのように不登校の子どもたちを受け入れている組織や団体に対する支援策の在り方を本格的に検討し始めた。

教育委員会が不登校の子どもたちのために学校とは別に設けた学びの場である「適応指導教室」と共に民間の実践にも目を向け、国としてできることを探る。

渡辺さんはこうした動きを前向きに受け止める。横浜市にも適応指導教室があり、重要な役割を果たしている。学校にも適応指導教室にもないものを不登校の子どもたちに贈りたい。そんな思いで、日々を過ごす。

国の支援が得られるなら、活動資金も欲しいが常勤で活動を支えてくれる人員を配置してほしいと願う。善意だけで人手を確保してきたが、手伝ってくれる人たちにはそれぞれの事情がある。当番を果たせるとは限らない。いつもそばで手伝ってくれる人がいてくれることの心強さといったらない。

学校の中からも外からも不登校の子どもたちを支えてきた渡辺さんは、民生委員、主任児童委員らの研修会で講師を務めてきた。今年6月で68歳。これからも多くの人と手を携えて、学校になじめない子どもたちを支えていきたい考えだ。

元小学校長の渡辺さん（写真右）が扉を開けるとニワトリは卵を産んでいた（2月25日、横浜市内で）